

SuperExpress 古典語文法（1）：何が現代語と違うか

まず、現代日本語と古典日本語がどのように違うか、具体的な例で見てください。次にあげるテキストは、四年生の皆さんが三年生の時に学習したものの一部です。それを古典語風に「翻訳」してみました。読んでみてください：

以前、ヨーロッパを旅行した時、こんな経験をした。観光バスに乗ってあちらこちらを見て回った時のことである。私は三歳の孫を抱いていた。バスに乗り合わせた四十人ばかりの乗客はみな外国人だった。子どもをかわいがる人たちだと見えて、私のそばを通る時に、孫の顔を見て、にっこり笑ったり、手を振ったり、孫の手を握ったり、あるいは自国の言葉で声をかけたりしてくれる。

そのうちに、一人の中年の婦人が突然孫の方に顔を寄せて、日本語で「今日は」と言った。意外なことに私はびっくりしてしまった。いかにも人の良さそうな笑顔だった。おそらくその人は日本に来たことがあるのであろう。日本語を覚えていて、しかも、私たちが日本人であることを知って、わざわざ日本語であいさつをしてくれたのだろう。私はこういう人たちに大変親しみを感じた。

こんな時、日本人だったら、どうしただろう。知らない人同士がバスに乗り合わせたら、互いにあいさつをするだろうか。どちらかと言うと、あまり話をしないのではないかと思われる。特に私たちみたいな子ども連れの外国人がいたら、その人たちに対してどんな態度をとるだろうか。おそらく積極的に声をかける人は少ないだろう。知らない人と話すのは恥ずかしい、めんどろなど大部分の人が思ってしまうのではないか。

* * * * *

かつてヨーロッパを^{たび}旅せし^{おり}折、かくのごときを経験せり。観光バスに乗りて、あちこちを見て回れる時のことなり。我は三歳なる孫を抱^{まご}けり。バスに乗り合わせし四十人ばかりの客、みな異国人なりき。幼^{いこくじん}き児を愛づらしが^{おきな}る人々と見ゆ、我が傍^{かたは}らを通る折に、孫の顔^{のぞ}を覗きてにこりと笑むもあり、手を振り、孫の手を握りなどするもあり。自国の言葉にて声かけ来るきへありけり。

さあるうちに、婦人の、年^{とし}やや長^{ちよう}じたる一人、つと孫の方に顔を寄せ来て、和語にて「今日は」とぞ言ひたる。意外なることに、我はいたく驚^{ひとがら}けり。人柄のいかにか良かるらむ、かく思はるる笑顔なりき。その人、かつて日本国に来たることあるべし。その折に覚えし和語を忘れで、我らの日本人なるを知りたれば、わざわざ和語にてあひきつしたるにやあらむ。我、かかる人々に格別の親しみを覚えぬ。

かやうなる時に、もしや日本人なりたらば、いかにか振る舞^ふひたらむ。見知らぬ者同士、バスに乗り合わせたるに、互ひにあひきつなど交^まはすことあらむや。どちらかと言はば、親しく言葉を交^まはすは稀なるにやあらむ。況して異国人の、我のごとく幼子^{おさなご}を連れたるに向かひては、いかなる振る舞^まひかはこそせめ。察^{さつ}するに、あえて声かくるは少なからむ。大方は、知らぬ人と話すは恥^{はず}ずかし、煩^{わづら}わしなどと思へるにやあらむ。

【比較の方法】

現代語と古典語の違いを理解するためには、まず、分析のための道具を用意することが必要です。ここでは、言語学で使われる方法を利用しましょう。それは「形態論 (Morphology)」という方法です。簡単な例で、それを見てみましょう：

① 以前、ヨーロッパを旅行した時、こんな経験をした。

まず、この文を「単語節 (one word phrase)」に分けます。単語節は、日本人がこの文章をゆっくりと読んだ場合に短い休みを入れるところで、区切られます：

② 以前/ヨーロッパを/旅行した/時/こんな/経験を/した//

そしてこれを、ローマ字表記（発音）に改めます：

③ izen/yooroppawo/ryokoosita/toki/konna/keikenwo/sita//

この表記では、単語節の内部はまだ分析されていません。そこで、単語節の内部を更に細かく区切っていきます。区切られた一つ一つが「形態素 (morpheme)」です。

④ izen/yooroppa.wo/ryokoo.si.ta/toki/konna/keiken.wo/si.ta//

さらに、形態素を「自立語」と「付属語」に区別します。形態論では自立語を「語彙素 (lexeme)」、付属語を「接辞 (affix)」と呼んでいます。自立語（語彙素）は大文字で書きます：

⑤ IZEN/YOOROPPA.wo/RYOKOO.SI.ta/TOKI/KONNA/KEIKEN.wo/SI.ta//

そして、これらの形態素の品詞 (word class)を調べ、それを記号で示します：

⑥ M / N=p / N+V+f / N / D / N=p / V+f //

それでは、同じ分析を古典語の文で行ってみましょう：

(1) かつてヨーロッパを旅せし折、かくのごとき経験をせり。

(2) かつて/ヨーロッパを/旅せし/折/かくの/ごとき/経験を/せり//

(3) katute/yooroppawo/tabisesi/ori/kakuno/gotoki/keikeinwo/seri//

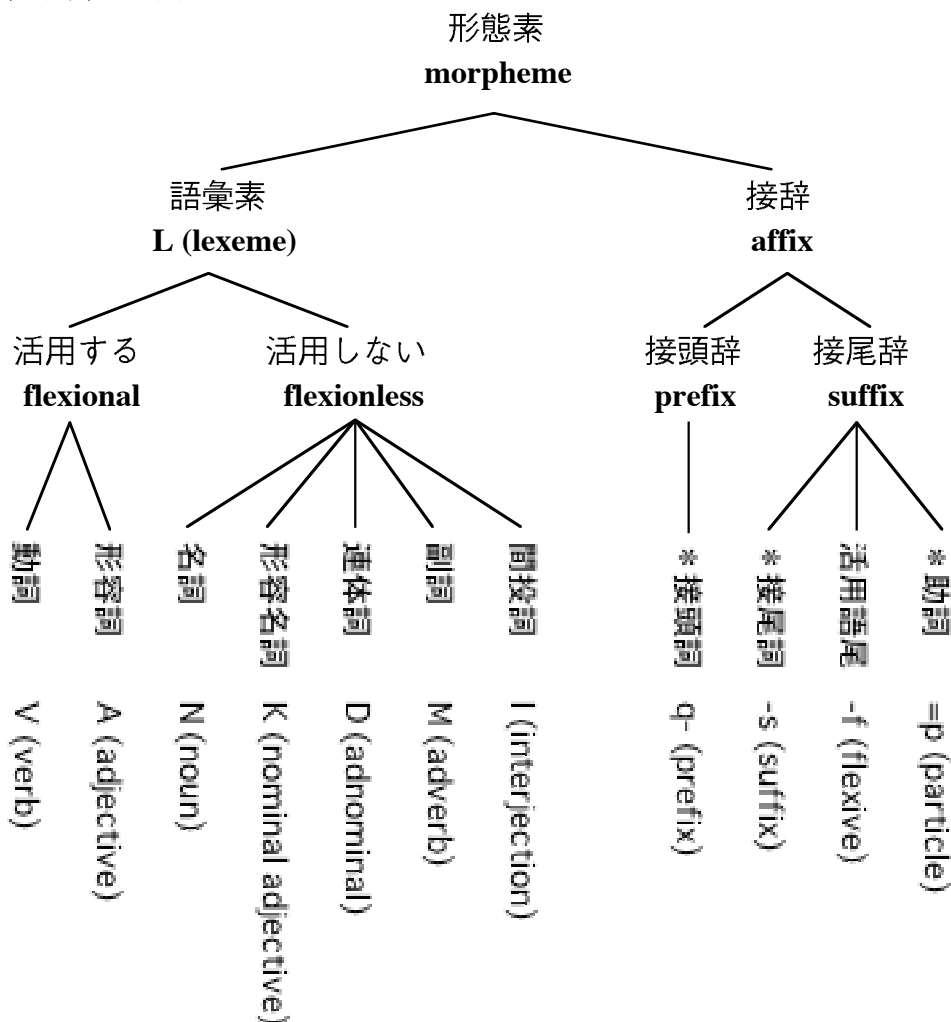
(4) katute/yooroppa.wo/tabise.si/ori/kaku.no/goto.ki/keikein.wo/se.ri//

(5) KATUTE/YOOROPPA.wo/TABISE.SI/ORI/KAKU.no/GOTO.ki/KEIKEIN.wo/SE.ri//

(6) M / N=p / N+V+f / N / M=p / A+f / N=p / V+v //

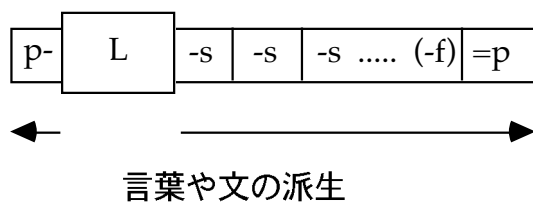
【日本語の形態素の種類と性質】

日本語の形態素には、次のような区別があります。そのうち、語彙素には7つの品詞があります。さらに、語彙素には活用するものと、活用しないものがあります。活用(^{かつよう}flexion)とは、文中でその形が変わるということです。この形の変化は、活用語尾を代えることで起こります。日本語では、動詞と形容詞が活用します。



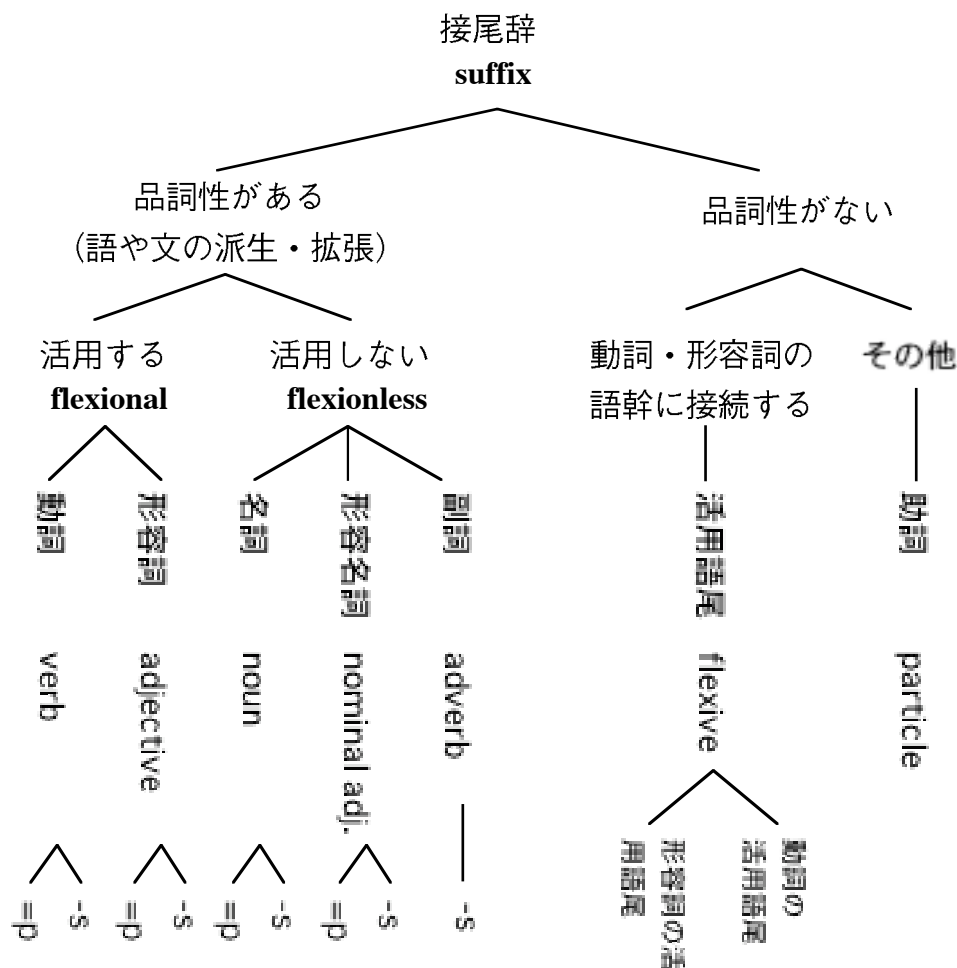
【接辞の機能：派生】

接辞は、語彙素の前や後に付きます。日本語では接頭辞はあまり発達していません。そのかわり、たくさんの接尾辞があります。接尾辞は一つだけでなく、複数付くことができます。接辞が付くことによって、基となる語彙素は、新しい意味を持つようになります。これを派生(^{はせい}derivation)といいます。派生で生まれた語を派生語と呼びます。辞の中には、語に付くのではなく、文に付くものもあります：



【接尾辞の種類】

日本語の接尾辞を詳しく調べると、それがさらにいろいろな種類に区別できることが分かります。まず、語彙素と同じように、品詞の区別を持つものがあります。つまり、名詞や形容詞、形容名詞、副詞、動詞として働く接尾辞です。ですから、このような接尾辞には、活用するものと活用しないものが分けられることになります。品詞の区別を持たないものには、助詞と活用語尾があります。活用語尾には、動詞の活用語尾と形容詞の活用語尾の区別があります。



【接尾動詞と助動詞の区別】

ところで、品詞の区別を持つ接尾辞をよく調べると、さらに2つの種類があることが分かります。例えば、動詞として働く接尾辞には、動詞や形容詞の活用語尾の後ろに付くことができるものと、できないものがあります。活用語尾の後ろに付く接尾辞は、実は文の派生を行っているのです。これを助動詞と呼びます。それに対して、活用語尾の後ろに付けないものは、語の派生を行うものなのです。

補論：現代日本語の動詞と形容詞

【表一 1：現代日本語の動詞の種類】

子音動詞 consonant verbs (Vc)	<i>b</i> -stem	遊ぶ…	/ ASOB.u/ ...	
	<i>g</i> -stem	急ぐ…	/ ISOG.u/ ...	
	<i>k</i> -stem	書く…	/ KAK.u/ ...	
	<i>m</i> -stem	読む…	/ YOM.u/ ...	
	<i>n</i> -stem	死ぬ	/ SIN.u/	
	<i>r</i> -stem	帰る…	/ KAER.u/ ...	
	<i>s</i> -stem	貸す…	/ KAS.u/ ...	
	<i>t</i> -stem	待つ…	/ MAT.u/ ...	
	{ <i>w</i> }-stem	買う…	/ KA{W}.u/ ...	
母音動詞 vocalic verbs (Vv)	<i>e</i> -stem	食べる…	/ TABE.ru/ ...	
	<i>i</i> -stem	見る…	/ MI.ru/ ...	
不規則動詞 irregular verbs (Vu)	本来の不規則動詞 (Vu ₁)	<i>k</i> -stem	来る	/ K .uru/
		<i>s</i> -/ <i>z</i> -stem	す・する	/ S.u/, / S .uru/
			達す・達する 演ず・演ずる…	/ TASS .u/, / TASS .uru/ / ENZ .u/, / ENZ .uru/ ...
		<i>mas</i> -stem	ございます 派生語「～ます」	/ GOZAIMAS.u/ /-mas.u/
	<i>as</i> -stem	派生語「～す」	/-Sas.u/	
	Vcに近い不規則動詞 (Vu ₂)	<i>ar</i> -stem	いらっしゃる…	/ IRASSYAR.u/ ...
		<i>k</i> -stem	行く	/ IK.u/
Vvに近い不規則動詞 (Vu ₃)		得る 派生語「～得る」	/ Ø.u ru/ or / E.ru/ /-ø.u ru/ or /-e.ru/	

- ？ 「愛する /AI.S.uru/」 「愛す /AIS.u/」
「愛しよう /AI.SI.yoo/」 「愛そう /AIS.oo/」
「愛しろ /AI.SI.ro/」 「愛せ /AIS.e/」
「愛すれば /AI.S.ureba/」 「愛せば /AIS.eba/」
「愛せず /AI.SE.zu/」 「愛さず /AIS.azu/」
「愛しない /AI.SI.na.i/」 「愛さない /AIS.ana.i/」

【表－ 2 : 活用・派生の基本となる形】

	V _c	V _v		V _u	
	読む	起きる	受ける	する	来る
語幹 stem	YOM	OKI	UKE	S	K
語基 basis	YOMI	OKI	UKE	SI	KI
母音語幹 vocalic stem	—	—	—	SE	KO

【表－ 3 : 動詞の活用形と活用語尾】

	語幹 (<i>stem</i>) を使う形			語基 (<i>basis</i>) を使う形		
終止法 <i>finite forms</i>	present *)	/-Ru/	書く 見る	perfect	/-Ta/	書いた 見た
	future	/-Yoo/	書こう 見よう	perfect-future	/-Taroo/	書いたらう 見たらう
	imperative	/-e/ /-ro/	書け 見ろ			
	(negated future: /-mai/)		— 見まい			
連用法 <i>adverbial forms</i>	conditional	/-Reba/	書けば 見れば	perfect-conditional	/-Tara(ba)/	書いたら (ば) 見たら (ば)
	negated participle*)	/-Azu/	書かず 見ず	participle	/-Te/	書いて 見て
				exemplative	/-Tari/	書いたり 見たり

*) /-Azu/と/-Ru/の組合せに、連体法(adnominal form)の否定現在形/-Azaru/がある。

【表－ 4 : 子音動詞の音便規則】

	classical forms: /v _{basis} +te/		modern forms (音便形)	
b-, m-, n- stem	/...b(m,n)i.t.../	遊びて…	/... n.d .../	遊んで…
g- stem	/...gi.t.../	泳ぎて…	/... i.d .../	泳いで…
k- stem	/...ki.t.../	聞いて…	/... i.t .../	聞いて…
r-, t-, {w}- stem	/...r(t,{w})i.t.../	帰りにて…	/... t.t .../	帰って…
ar- stem	/...ari.t.../	なさりにて…	/... t.t .../	なさって…
例外(1): s-/mas- stem	/...si.t.../ /...masi.t.../	話して… ～まして	/...si.t.../ /...masi.t.../	話して… ～まして
例外(2): k- stem	/iki.t.../	行きて	/i t.t .../	行って

【表－5：動詞に連なる接尾動詞】

to the <i>stem</i>	“ <i>causative</i> ”	/-Sase.ru/	書かせる 行かせる 見させる 得させる	V _{u1} 来させる / KO.sase.ru / させる / S.ase.ru / 使役受動 (V _v , V _{u1})+ <u>Sase</u> +Rare.ru (V _c :s-stem)+ <u>Sase</u> +Rare.ru
		/-Sas.u/	書かす 行かす 見さす 得さす	V _{u1} 来さす / KO.sas.u / さす / S.as.u / 使役受動 (V _c :other)+ <u>Sas</u> +Rare.ru
		/-Asime.ru/	書かしめる 行かしめる —	* 文語的。 (V _{u1} : s-/z-stem): <u>vocalicstem</u> 演ぜしめる / ENZE.sime.ru /
	“ <i>passive</i> ” “ <i>honorative</i> ”	/-Rare.ru/	書かれる 行かれる 見られる 得られる	* 本来は「迷惑受け身」。 * 尊敬表現としても使用。 V _{u1} 来られる / KO.rare.ru / される / S.are.ru / (V _{u1} :s-/z-stem): <u>vocalicstem</u>
	“ <i>potential</i> ”	/-Rare.ru/	見られる 得られる	* 主に <u>V_v</u> と共に。 V _{u1} 来られる / KO.rare.ru / される ⇒ 「できる」 (V _{u1} :s-/z-stem): <u>vocalicstem</u>
		/-Re.ru/	書ける 行ける	* 主に <u>V_c</u> と共に。
“ <i>negation</i> ”	/-An.u/	書かぬ 行かぬ 見ぬ 得ぬ	* 文語的。主に <u>連体法</u> として。 V _{u1} 来ぬ / KO.n.u / せぬ / SE.n.u / (V _{u1} :s-/z-stem): <u>vocalicstem</u> (V _{u1} :mas-stem): /-mase.n. <u>tt</u> /	
to the <i>basis</i>	“ <i>honorative</i> ”	/-mas.u /	書きます	不規則動詞 (-V _{u1} : mas-stem)
	“ <i>neg. potential</i> ”	/-kane.ru/	書きかねる	「～かねない」= 「～かもしれない」
	“ <i>potential</i> ”	/-ø.uru/, /-E.ru/	書き得る	不規則動詞 (-V _{u3})
	“ <i>pejorative</i> ”	/-yagar.u/	書きやがる	* 俗語。
	“ <i>imperative</i> ”	/-tama{w}.e/	書き給え	* 文語的。命令形のみ。

【表一 6 : 接尾形容詞 (suffix adjectives: -a)】

to the <i>stem</i>	“negation”	/-Ana.i/	書かない 見ない 得ない	Vu ₁ : k-stem 来ない / KO.na.i / s-/z-stem しない / SI.na.i / 演じない / ENZI.na.i/
to the <i>basis</i>	“voluntative”	/-ta.i/	書きたい	

【表一 7 : 接尾形容名詞 (suffix nominal adjectives: -k)】

to the <i>basis</i>	“nearly ...”	/-soo/	降りそう 落ちそう	
	“tend to ...”	/-gati/	思いがち 考えがち	

【表一 8 : 接尾名詞 (suffix nouns : -n)】

to the <i>basis</i>	“way to ...”	/-buri/ or /-ppuri/	書き振り 食べっぷり	「力強い書きぶり」...
	“how to ...”	/-kata/	書き方 考え方	
		/-yoo/	書き様 考え様	「仕様がな」... * 「様 /ZAMA/」は名詞 (N)。

【表一 9 : 接尾副詞 (suffix adverbs : -m)】

to the <i>basis</i>	“repeatedly”	/-tu/	立ちつ	「行きつ戻りつ」...
	“while ...”	/-tutu/	思いつつ	「発展しつつある」...
	“on the way to...”	/-gatera/	書きがてら	「買い物しがてら」...
	“just before to ...”	/-sina/	書きしな	「寝しなにビールを飲む。」...
/-gake/		起きがけ		

【表－１０：形容詞の活用形と活用語尾】

	<i>to the stem forms</i>		
<i>finite form</i>	present	/-i/	白い
<i>adverval forms</i>	adverbial	/-ku/	白く
	participle	/-kute/	白くて
	conditional	/-kereba/	白ければ

【表－１１：形容詞の活用形を補完する派生形】

	<i>before contraction</i>	<i>after contraction</i>	
(1) future :	(白く <u>あ</u> ろう)	白かろう	/SIRO.kar.oo/
(2) imperative :	(白く <u>あ</u> れ)	白かれ	/SIRO.kar.e/
- negated future :	(白く <u>あ</u> るまい)	—	
(3) negated participle :	(白く <u>あ</u> らず)	白からず	/SIRO.kar.azu/
negated present :	(白く <u>あ</u> らざる)	白からざる	/SIRO.kar.azaru/
(4) perfect :	(白く <u>あ</u> った)	白かった	/SIRO.kat.ta/
(5) perfect-future :	(白く <u>あ</u> ったろう)	白かったろう	/SIRO.kat.taroo/
(6) perfect-conditional :	(白く <u>あ</u> ったら)	白かったら	/SIRO.kat.tara/
(7) exemplative :	(白く <u>あ</u> ったり)	白かったり	/SIRO.kat.tari/

○動詞・形容詞と共に使われる接尾辞について

【表－１０：動詞に付く接尾動詞(suffix verb)】

語幹に付く (to the <i>stem</i>)	“causative”	/-Sase.ru/	書かせる 行かせる 見させる 得させる	Vu ₁ 来させる / KO.sase.ru / させる / S.ase.ru / 使役受動 (Vv, Vu ₁)+Sase+Rare.ru (Vc:s-stem)+Sase+Rare.ru
		/-Sas.u/	書かす 行かす 見さす 得さす	Vu ₁ 来さす / KO.sas.u / さす / S.as.u / 使役受動 (Vc:other)+Sas+Rare.ru
		/-Asime.ru/	書かしめる 行かしめる —	* 文語的。 (Vu ₁ : s-/z-stem):vocalicstem 演ぜしめる / ENZE.sime.ru /
	“passive” “honorative”	/-Rare.ru/	書かれる 行かれる 見られる 得られる	* 本来は「迷惑受け身」。 * 尊敬表現としても使用。 Vu ₁ 来られる / KO.rare.ru / される / S.are.ru / (Vu ₁ :s-/z-stem):vocalicstem
		/-Rare.ru/	見られる 得られる	* 主に <u>Vv</u> と共に。 Vu ₁ 来られる / KO.rare.ru / される ⇒ 「できる」 (Vu ₁ :s-/z-stem):vocalicstem
	“potential”	/-Re.ru/	書ける 行ける	* 主に <u>Vc</u> と共に。
		/-An.u/	書かぬ 行かぬ 見ぬ 得ぬ	* 文語的。主に <u>連体法</u> として。 Vu ₁ 来ぬ / KO.n.u / せぬ / SE.n.u / (Vu ₁ :s-/z-stem):vocalicstem (Vu ₁ :mas-stem):/-mase.n.ʷ/
語基に付く (to the <i>basis</i>)	“honorative”	/-mas.u /	書きます	不規則動詞 (-Vu ₁ : mas-stem)
	“neg. potential”	/-kane.ru/	書きかねる	「～かねない」=「～かもしれない」
	“potential”	/-ø.uru/, /-E.ru/	書き得る	不規則動詞 (-Vu ₃)
	“pejorative”	/-yagar.u/	書きやがる	* 俗語。
	“imperative”	/-tama{w}.e/	書き給え	* 文語的。命令形のみ。

【表－ 1 1 : 動詞に付く接尾形容詞(suffix adjectives: -a)】

to the <i>stem</i>	“negation”	/-Ana.i/	書かない 見ない 得ない	Vu1: <i>k</i> -stem 来ない / KO.na.i / <i>s</i> / <i>z</i> -stem しない / SI.na.i / 演じない / ENZI.na.i /
to the <i>basis</i>	“voluntative”	/-ta.i/	書きたい	

【表－ 1 2 : 動詞に付く接尾形容名詞(suffix nominal adjectives: -k)】

to the <i>basis</i>	“nearly ...”	/-soo/	降りそう 落ちそう	
	“tend to ...”	/-gati/	思いがち 考えがち	

【表－ 1 3 : 動詞に付く接尾名詞(suffix nouns : -n)】

to the <i>basis</i>	“way to ...”	/-buri/ or /-ppuri/	書き振り 食べっぷり	「力強い書きぶり」...
	“how to ...”	/-kata/	書き方 考え方	
		/-yoo/	書き様 考え様	「仕様がない」... * 「様 /ZAMA/」は名詞 (N)。

【表－ 1 4 : 動詞に付く接尾副詞(suffix adverbs : -m)】

to the <i>basis</i>	“repeatedly”	/-tu/	立ちつ	「行きつ戻りつ」...
	“while ...”	/-tutu/	思いつつ	「発展しつつある」...
	“on the way to...”	/-gatera/	書きがてら	「買い物しがてら」...
	“just before to ...”	/-sina/	書きしな	「寝しなにビールを飲む。」...
/-gake/		起きがけ		

【表－ 1 5 : 形容詞に付く狭義の接尾辞】

suffix verbs (-v)	–	/-kar.u/	(白かる)
	“suffer/be worried”	/-gar.u/	痛がる、ほしがる
	“become ...”	/-m.u/	痛む、悲しむ
	or “make it ...”	/-mar.u/ /-mer.u/	広まる、深まる 広める、悲しめる
suffix adjectives (-a)	“relatively ...”	/-ppo.i/	白っぽい、黒っぽい
		/-ta.i/	重たい、煙たい
	“find it ...”	/-rasi.i/ /-tarasi.i/	可愛らしい 長たらしい
suffix nominal adjectives (-k)	“it seems ...”	/-soo/	寒そう、楽しそう
		/-ge/	悲しげ、嬉しげ
suffix nouns (-n)	“how ...it is”	/-sa/	白さ、暑さ
		/-mi/	厚み、重み
suffix adverb (-m)	“relatively ...”	/-me/	厚め、早め

○ 動詞の種類

現代語の動詞は、次のように分類されましたね：

第一グループ(Vc)		第二グループ(Vv)	不規則動詞(Vu)
①遊ぶ /ASOB.u/	⑥帰る /KAER.u/	①見る /MI.ru/	①する /S.uru/
②急ぐ /ISOG.u/	⑦貸す /KAS.u/	②食べる /TABE.ru/	②来る /K.uru/
③書く /KAK.u/	⑧待つ /MAT.u/		...
④読む /YOM.u/	⑨買う /KA(W).u/		
⑤死ぬ /SIN.u/			

この表から活用語尾は第一グループでは/-u/、第二グループでは/-ru/、不規則動詞では/-uru/であることが分かります。

さて、古典語の動詞も大きく分けて第一グループ、第二グループ、それに不規則動詞の3つに区別することができます。しかし現代語と違って、それぞれがさらに下位グループに分けられます。

1. まず第一グループです。これは3つの下位グループに区別されますが、ここではVc, Vcr, Vnという記号で表わします。Vcは、現代語の第一グループ（学校文法では五段活用動詞と呼ばれます）とほぼ同じで、学校文法では四段活用動詞と呼ばれます。VcrとVnはVcの例外で、その数は限られています。Vcrは学校文法ではラ行変格活用動詞（ラ変）、Vnはナ行変格活用動詞（ナ変）と呼ばれています。

2. 第二グループの動詞にも、3つの下位グループがあります。Vv, Vi, Veです。Vvは現代語の第二グループとほぼ同じです。学校文法ではさらに上一段活用動詞と下一段活用動詞の2つに分けられていますが、下一段動詞には「蹴る」という動詞1つしかありませんから、ここではまとめて記号Vvで表わすことにします。ViとVeは、現代語にない、古典語独特のグループです。学校文法では上二段活用動詞、下二段活用動詞と呼ばれています。これら二段動詞では、終止形（文を終らせる形、dictionary form）の活用語尾が/-u/で、四段動詞と同じですが、それ以外の活用形は異なります。この二段動詞のうち、語基（連用形）が母音/i/で終るものがVi、母音/e/で終るものがVeです。

3. 不規則動詞の「する」と「来る」は、古典語では「す」と「く」です。学校文法では「す」をサ行変格活用動詞（サ変）、「く」をカ行変格活用動詞（カ変）と呼んでいます。古典のサ変には「す」の外に、「～ず」となる動詞があります。例えば「演ず」「感ず」「信ず」「命ず」などです。現代語と同じように、「す／ず」「く」には、語幹、語基の外に、もう一つ特別な語幹の形「せ／ぜ」「こ」があります。これを母音語幹 (vocalic stem)と呼びます。

○動詞の活用形（第一表：現在）

古典日本語の動詞と形容詞では、その活用形を3つの表にまとめることができます。第一表が「現在」、第二表が「過去」、そして第三表が「否定」です。第一表「現在」には しゅうし れんたい いぜん みぜん 終止形、連体形、已然形、未然形、命令形の5つの活用形があります。

1. 終止形：/-Ru/

文を終わらせる形です。その活用語尾はV vの場合だけ/-ru/ですが、その他の動詞ではVcrを除いてすべて/-u/です。Vcrは例外で、終止形に語基（学校文法では^{れんよう}連用形）が使われます。

2. 連体形：/-URu/

動詞が名詞（体言）の前にあるときに使われる形です。現代語では終止形と同じですが、古典語では区別されます。Vc, Vcrの場合は/-u/、V vでは/-ru/で、現代語の場合と違いありませんが、Vn, Vi, Ve, Vuでは/-uru/となります。

3. 已然形：/-URe/

これは現代語にはない形です。「既にある事実や状況」という意味です。普通はさらに助詞「は／ば」や「ど／ども」が続きます。例えば「雨降れば」は、現代語の「雨が降るので」や「雨が降ると」に当たり、「雨降れど」は現代語の「雨が降るが／降るけれど」に当たります。活用語尾はVc, Vcrでは/-e/、V vでは/-re/、Vn, Vi, Ve, Vuでは/-ure/です。

4. 未然形：/-Aba/

これは現代語の「～ば」「～たら」の形に相当するもので、仮定条件を意味します。つまり「まだない事実や状況」です。活用語尾は第一グループ（Vc, Vcr, Vn）で/-aba/ですが、第二グループ（Vv, Vi, Ve）では語幹ではなく、語基（連用形）に/-ba/が付きます。不規則動詞では母音語幹に/-ba/が付きます。

5. 命令形：/-e/ , /-yo/

第一グループ（Vc, Vcr, Vn）では現代語と同じように、語幹に活用語尾/-e/が付きますが、第二グループ（Vv, Vi, Ve）では語基（連用形）、不規則動詞では母音語幹に/-yo/が付きます。実は/-yo/は活用語尾ではなく助詞/=yo/なのですが、活用語尾と同じに考えても、今は問題ありません。

実践練習（一）

親鸞『歎異抄』－ [四]

慈悲じひに聖道しょうどうと浄土じょうどのかはりめあり。聖道の慈悲といふはものをあはれみ、
 かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもふがごとくたすけとぐること
 きはめてありがたし。また浄土の慈悲といふは、念仏ねんぶつしていそぎほとけ仏となりて
 大慈大悲心だいじだいひしんをもて、おもふがごとく衆生しゅじょうを利益りやくするをいふべきなり。今生こんじょうに
 いか「いとほしふびん、不便ふびん [なり]」とおもふとも、存知ぞんちのごとくたすけがたけ
 れば、この慈悲始終しじゅうなし。しかれば、念仏ねんぶつまうすのみぞ、すえとをりたる
 大慈悲心だいじだいひしんにてきふらふべきと、云々。

あり	「あり」	Vcr	終止形現在	「ある」
いふ	「言ふ」	Vc	連体形現在	「言うもの／言うの」
あはれみ	「憐れむ」	Vc	語基（連用形）	「あわれみ」
かなしみ	「悲しむ」	Vc		
はぐくむ	「育む」	Vc		
おもふ	「思ふ」	Vc		
たすけ	「助く」	Ve		
とぐる	「遂ぐ」	Ve		
いふ	「言ふ」	Vc		
して	「す」	Vu	（語基/SI/に、接尾動詞/-t.u/の語基/-te/が付いたもの。）	
いそぎ	「急ぐ」	Vc		
なりて	「成る」	Vc		
もて	「持つ」	Vc	（「持ちて」の「ち」が省略されたもの。「以って」。）	
おもふ	「思ふ」	Vc		
する	「す」	Vu		
いふ	「言ふ」	Vc		
なり	「なり」	=vcr	（助動詞/=nari/の終止形現在。「～だ」「～である」）	
おもふ	「思ふ」	Vc		
たすけ	「助く」	Ve		
まうす	「申す」	Vc		
とをりたる	「通る」	Vc	（語基に接尾動詞/-tari/の連体形現在/-tar.u/が付いたもの。）	
さふらふ	「候 <small>さぶら</small> ふ」	Vc	終止形現在。謙讓語・丁寧語「～でございます」	

○動詞の活用形（第二表：過去）

動詞の活用形の第二表は「過去」です。この表には終止形、連体形、已然形の3つしかありません。第一グループと第二グループの動詞では語基（連用形）が使われ、不規則動詞では母音語幹が使われます。

1. 終止形：/-ki/
2. 連体形：/-si/
3. 已然形：/-sika/

なお、古代日本語には未然形（/-seba/）もあったようですが、平安時代以降には和歌でしか使われなくなりました。

実践練習（二）

どうげん しょうぼうがんだうずいもんき
道元『正法眼蔵随聞記』第一（九）より

や わ いは ろちゅうれん い しょうぐん へいげんくん あり よ ちょうてき
夜話に云く、昔魯仲連と云ふ將軍ありき。平原君が国に在て能く朝敵をたひら
ぐ。平原君 しょう かずおおく 賞して数多の金銀等を与へしかば、魯仲連 じ いは た 辞して云く、只だ將軍のみち
なれば敵を能く討つのみなり、賞を得て物をとらん為に非ずと云ひて、敢て取らずと
云ふ…

こきん わ かしゅう はるのうた
『古今和歌集』第一巻 春歌上 より

そで 袖ひちて むすびし水の こほれるを 春立つけふの 風やとくらむ

きのつらゆき
紀貫之

○動詞の活用形（第三表：否定）

さて、第一表「現在」と第二表「過去」のあわせて8つの形が、動詞の最も基本的な活用形ですが、それらはすべて「肯定」でしす。それに対して「否定」を表わす特別の活用形が3つあります。第一グループでは語幹、第二グループでは語基、不規則動詞では母音語幹が使われます。

1. 否定の終止形・連用形一：/-Azu/ 「書も読まず、文も書かず。」
2. 否定の未来形・意志形：/-Azi/ 「書も読まじ。文も書かじ。」
3. 否定の連用形二：/-Ade/ 「書も読まで、文書くばかりなり。」

しかし、この3つの形のうち、基本の8つの形と重なるのは終止形/-Azu/だけです。それでは、残りの7つの形を否定するには、どうしたらよいでしょうか。この問題を解決するために、接尾動詞/-An.u/を使った派生形(derivatives)が利用されました。しかし、接尾動詞/-An.u/には語基の形がないため、語基が必要なときは/-Azari/を使用しました。

○ 派生形はなぜ必要か

さて、これまで動詞の活用形を見てきましたが、それには現在の形（第一表）と過去の形（第二表）、それに否定の形の一部（第三表）がありました。しかし、これだけでは足りない場合があります。例えば、否定の形の場合がそうです。第三表の形だけでは、第一表および第二表の８つのうち、一つしか否定できません。また、未来や完了の形、それに現代語の「～ている」などの表現も、活用形だけでは作ることができません。こうした場合に、派生形が利用されます。

すでに説明したように、動詞の活用形は活用語尾が変わることによって作られました。その際に変化しないところが語幹でしたが、派生形とはこの語幹が変化するのです。言い換えれば、語幹に新しい部分が加わって、別の語幹が作られるのです。この新しい部分を接頭詞(prefix)、接尾詞(suffix)と言います。接頭詞は語幹の前に付き、接尾詞は語幹の後ろに付きます。日本語では古典語でも現代語でも、接尾詞が発達して、さまざまな種類があります。一番多いのは接尾動詞(suffix verb)と接尾名詞(suffix noun)で、その次が接尾形容詞(suffix adjective)です。以下では接尾動詞の使い方を説明します。

1. 接尾動詞グループ A

このグループの接尾動詞は、第一グループの動詞(Vc, Vcr, Vn)では語幹、第二グループの動詞(Vv, Vi, Ve)では語基、不規則動詞(Vu)では母音語幹「せ/ぜ」「こ」の後ろに付きます。/-An.u/, /-Am.u/, /-Sas.u/, /-Rar.u/などが、このグループの接尾動詞です。その際、次の２点に注意してください：

- ① それぞれの最初の文字が大文字で書かれている場合、その部分は取り除かれることがある。例えば/-An.u/の最初の文字は母音/A/である。第一グループの動詞の語幹は子音で終わっている。そこに接尾動詞/-An.u/が付くときには、この母音/A/は残る。しかし、第二グループの動詞に付くときは、語基が使われる。語基は母音で終わっているため、この母音/A/は取り除かれる。その反対が/-Sas.u/の場合である。その最初の文字は子音/S/である。したがって、第一グループの動詞に付くときは、この子音/S/は取り除かれる。それに対して第二グループの動詞に付くときは、この子音/S/は残る。
- ② 接尾動詞自体も一般の動詞と同じく、-vc, -vcr, -veなどのグループに分けられる。そして各々のルールに従って活用する。

それでは、これらの接尾動詞が実際にどのように使われるか、見てみましょう：

	Vc	Vcr	Vv	Vi	Ve	Vu	
/-An.u/	読まぬ	あらぬ	見ぬ	起きぬ	開けぬ	せぬ	来ぬ
/-Am.u/	読まむ	あらむ	見む	起きむ	開けむ	せむ	来む
/-Sas.u/	読ます	あらす	見さす	起きさす	開けさす	せさす	来さす
/-Rar.u/	読まる	あらる	見らる	起きらる	開けらる	せらる	来らる

この表にあげられている形は、すべて終止形現在です。上記②でも触れたように、これ

らの派生動詞は、さらにそれぞれの動詞グループのルールにしたがって活用します。それを「読む」の場合を例にして示します：

Stem+flexive 語基（連用形）	/YOM.an.u/ (V'c)	/YOM.am.u/ (V'c)	/YOM.as.u/ (V'e)	/YOM.ar.u/ (V'e)
終止形	読まぬ → 読まず	読まむ	読ます	読まる
連体形	読まぬ	読まむ	読まする	読まるる
已然形	読まね (ば/ど)	読まめ (ば/ど)	読ますれ (ば/ど)	読まるれ (ば/ど)
未然形	読まなば → 読まずは	読ままば	読ませば	読まれば
命令形	読まね	読まめ	読ませよ	読まれよ
終止形過去			読ませき	読まれき
連体形過去			読ませし	読まれし
已然形過去			読ませしか (ば/ど)	読まれしか (ば/ど)

同様に、これらの接尾詞は重ねて使用することもできます。「書く」を例にすると、次のようになります：

Stem+flexive 語基（連用形）	/KAK.u/ (Vc)	/KAK.as.u/ (V'e)	/KAK.ase.rar.u/ (V'e)	/KAK.ase.rare.tamah.u/ (V'c)
終止形	書く	書かす	書かせらる	書かせられ給ふ
連体形	書く	書かする	書かせらるる	書かせられ給ふ
已然形	書け (ば/ど)	書かすれ (ば/ど)	書かせらるれ (ば/ど)	書かせられ給へ (ば/ど)
未然形	書かば	書かせば	書かせられば	書かせられ給はば
命令形	書け	書かせよ	書かせられよ	書かせられ給へ
終止形過去	書きき(?)	書かせき	書かせられき	書かせられ給ひき
連体形過去	書きし	書かせし	書かせられし	書かせられ給ひし
已然形過去	書きしか (ば/ど)	書かせしか (ば/ど)	書かせられしか (ば/ど)	書かせられ給ひしか (ば/ど)

2. 接尾動詞グループ B

/-eri/ という接尾動詞は、第一グループの動詞の語幹と、不規則動詞「す」の母音語幹にしか使われません。意味はグループCの/-tari/ と同じですから、第二グループの動詞には/-tari/ を使います。

3. 接尾動詞グループ C

完了を表わす接尾動詞には/-t.u/, /-n.u/, /-tari/, /-keri/ の4つがあります。これらの接尾動詞は、すべての動詞グループの語基に付きます。このうち、/-keri/ は、本来「伝承に基づく過去の形」であって、完了ではありませんでしたが、Vcr（「あり」「をり」「はべり」）や、それから生まれた接尾詞や助詞(/-kari/, /-Azari/, /-kar.azari/, /-tari/, /-nari/...)には/-keri/ だけが使われ、他の接尾動詞は使われません。

○ 派生と活用の順番

ところで、これまで学んで来た活用形と、接尾詞による派生形は、どんな順番で使ったらいのでしょうか。

1. 時制や否定と関係のない接尾詞による派生が最初

これは、/-Sas.u/, /-Rar.u/, /-Asim.u/, /-tasi/, /-gar.u/などの接尾動詞、接尾形容詞などです。

2. 敬語用の接尾詞による派生がその次

次に、/-tamah.u/, /-maus.u/, /-mawir.u/などの尊敬や謙譲の接尾詞を使います。この段階で、語幹・語基の形が決まります。

3. 肯定か否定の決定

そして、肯定か否定かを決めます。肯定の場合は、この段階では何も決まりません。それに対して否定の場合には、/-Azu/, /-Azi/, /-Ade/の活用形か、/-An.u/, /-Azari/を使った派生形かの、2つの可能性が生まれます。

4. 時制の決定

古典日本語の時制としては、主に「未来」「現在」「過去」「完了」の4つがあります。「過去完了」を加えることもできますが、ここではあまり重要ではありません。

したがって、肯定の場合に「肯定形・未来」「肯定形・現在」「肯定形・過去」「肯定形・完了」の4つが決まります。否定の場合にも「否定形・未来」「否定形・現在」「否定形・過去」「否定形・完了」の4つが決まります。例えば：

《 肯定 》

未 来	現 在	過 去	完 了
読まむ	読む	読みき	読みつ／読みたり
読ませむ	読ます	読ませき	読ませつ／読ませたり
読ませ給はむ	読ませ給ふ	読ませ給ひき	読ませ給ひつ／読ませ給ひたり
…	…	…	…

《 否定 》

未 来	現 在	過 去	完 了
読まじ * 読まざらむ (adnom.)	読まず／読まで * 読まぬ	読まざりき 読まざりし	読まざりけり 読まざりける
読ませじ * 読ませざらむ	読ませず／読ませで * 読ませなぬ	読ませざりき 読ませざりし	読ませざりけり 読ませざりける
読ませ給はじ * 読ませ給はざらむ	読ませ給はず／読ませ給はで * 読ませ給はぬ	読ませ給はざりき 読ませ給はざりし	読ませ給はざりけり 読ませ給はざりける
…	…	…	…

このように、接尾動詞の中でも/-An.u/, /-Am.u/は最後に使われ、その後ろにまた別の接尾詞が付くことはありません。否定形・未来で/-An.u/は使えず、/-Azar.am.u/となります。

5. 活用形の決定

そして、すでに活用形が決定しているところ（上の例では*）以外では、用法にしたがって活用形を決めます。

6. 助詞による派生

最後に助詞が付きます。もちろん、文を拡張する助詞の場合は、これもまた活用します。

○ 形容詞の活用と派生

☆ 基本概念(4) 動詞と形容詞

日本語では、動詞と同様に形容詞も文を作ることができます。逆に、動詞も形容詞と同様に名詞を修飾することができます（連体形）。このように、動詞と形容詞はまったく同じ働きをします。つまり、動詞と形容詞は仲間なのです。この点は、現代語も古典語も同じです。

1. 形容詞の活用形

古典日本語の動詞には、現在の形が5つ、過去の形が3つ、そして否定の形が3つありました。全部で11です。これに対して形容詞の活用形は5つしかありません。終止形（「広し」）、連体形（「広き」）、已然形（「広ければ」）、未然形（「広くば」）、それに連用形（「広く」）です。すべて時制は現在です。このうち、動詞の活用形と共通なのは、連用形を除く4つです。

2. 形容詞の動詞化（派生形による補完）

日本語の動詞と形容詞は基本的に同じ働きをしますから、形容詞にも動詞と同じだけの形が必要になります。ところが、形容詞には動詞と共通の形が4つしかありませんから、7つ足りないこととなります。つまり、現在時制では命令形が1つ、過去時制では終止形・連体形・已然形の3つ、それに否定の3つの形です（/-Azu/, /-Azi/, /-Ade/）。このうち、/-Ade/は「～をしない」という意味ですから、状態を表わす形容詞とは使われません。したがって、6つの形が足りないこととなります。

そこで、これらの形は動詞の形を借りて作ります。つまり「広し」を「広くあり」と考えて動詞の形に変えます。これが2語ですが、それを1語にして広かりとします。これは形容詞の語幹(stem)に接尾動詞/-kari/ (-vcr)が付いた派生動詞です。そして、足りない形を作るのです。

現在と過去の否定の形も、同じようにして作ります。まず、派生動詞「広かり」の否定の終止形広からずを作ります。そしてさらに「広からず」は「広からずあり」と同じだと考えます。この2語を1語に縮小して広からざりという否定の派生動詞を作ります（これは「広くあらずあり」という3語を1語に縮小した形です）。そして、それを活用させます：

	肯定の形		否定の形	
	形容詞の活用形	動詞化「広かり」	動詞化「広からず」	動詞化「広からざり」
終止形現在	広し	(広かり)	広からず	
命令形		広かれ		広からざれ
連体形	広き	(広かる)		広からざる
已然形	広けれ (ば/ど)			広からざれ (ば/ど)
未然形	広くば/-は		広からずば/-は	
連用形	広く		広からず	
終止形過去		広かりき		広からざりき
連体形		広かりし		広からざりし
已然形		広かりしか (ば/ど)		広からざりしか (ば/ど)

これ以外に、「広からじ」という/-Azi/の形も考えられます。

○ 助詞の種類

助詞の種類は、学校文法では次のように区別されています：

① 格助詞	Case particles	が の つ に を へ と より から まで にて して
② 接続助詞	Conjunctive particles	ば/ばや/ばこ/をば と/とも ど/ども が を に て/ても/とて して で つつ ながら ものゆゑ
③ 係助詞	Emotive particles	は (をば) も ぞ なむ や/やは か/かは こそ な
④ 終助詞	Final particles	も か/かも/かな/かは/ものか かし が/がも/がな ばや な なむ や/やは よ ぞ そ
⑤ 副助詞	Adverbial particles	だに すら さへ のみ ばかり まで など
⑥ 間投助詞	Exclamatory particles	し/しも や を/ものを

○ 特に注意する助詞

1. 格助詞「が」と「の」

古典語では、文の主語 (subject) は、必ずしも助詞を必要としません。しかし、従文 (subsentence) の中では、動詞や形容詞の主語 (subject) が格助詞「が」「の」で示されることがあります：

まいて、雁^{かり}などの の つらねたるが、いと ちひさく みゆるは [おかし。]

思ひの ほかに 君が 来ませる。

かく 笑ひまするが はづかし。

からすの ねどこへ 行くとて、…

この 御子^{みこ} 三つに なり給ふ 年、御袴着^{おんはかまぎ}の こと、一の宮の たてまつりしに 劣らず … [せさせ給ふ。]

白き 鳥の 嘴^{はし}と 脚^{あし}と 赤き、鴨^{しぎ}の 大ききなる、…

また、格助詞「が」は所有 (possessive) を表すこともあります：

雁^{かり}が 音^ねの きこゆる 空に 月 渡る 見ゆ。

二千人の ひとを 竹取^{たけとり}が 家^{いへ}に 遣^{つかは}す。

2. 接続助詞「が」・「を」・「に」

状況や事情、理由などを説明する文に、助詞「が」「を」「に」が使われることがあります。この場合、その文の述語 (動詞や形容詞) は連体形になります (それに続く本文の述語ではありません)：

すでに 絶え入り給ひしが、… また 生き出で給ひ、…

自^{みづから}は 都^{みやこ}の 者にて きうらふが、ある夜、鬼神^{きじん}に つかまれて、…

奥つかたに 生ひ出でたる 人、いかばかりかは あやしかりけむを …
かくのみ 思ひくんじたるを、心も なぐさめむと 心苦しがりて 母 物
語など 求めて 見せ給ふに、げに おのづから 慰みゆく。
親の ^{うづまさ}太泰に こもり給へるにも こと事なく この ことを 申して …

3. 係助詞「ぞ」・「なむ(なん)」

文中に助詞「ぞ」や「なむ」が使われると、その文の述語(動詞や形容詞)は連体形になります：

花ぞ 昔の ^か香に にほひける。
はるばる 来ぬる 旅をしぞ 思ふ。
橋を 八つ わたせるに よりてなむ 八橋と いひける。

係助詞「や/やは」・「か/かは」

古典語では、疑問文は助詞「や」や「か」を使って作ります。普通の疑問文は助詞「や」、疑問詞の「たれ」「なに」「いつ」「いづれ」「いづこ」「いか」「いく～」などを使う疑問文の場合は、助詞「か」が使われます。この場合も、その文の述語(動詞や形容詞)は連体形になります：

前の 世にも、御ちぎりや 深かりけむ …
月や [昔の 月に] あらぬ、春や 昔の 春ならぬ
いづれの 御時にか [あらむ。]
生きとし 生ける もの、いづれか 歌を 詠まざりける。

係助詞「こそ」

文中に助詞「こそ」が使われると、述語が已然形になるという特別のルールがあります：

梅の 花の 色こそ 見えね ^か香やは かくるる
^{なかがき}中垣こそ あれ、一つ家の ^{いへ}様なれば …

《 動詞・形容詞 活用例 》

【～ずは (/–Azu.fa/)】

朽ちもせぬ この河ばしらの 残らずは 昔のあとを いかで知らまし (更級・3)

【～で (/–Ade/)】

まどろまじ 今宵ならでは いつか見む くろとの浜の 秋の夜の月 (更級・3)

などや苦しきめを見るらむ。わが国に七つ三つつくり据えたる酒壺にさし渡したる直柄のひたえひさごの、南風吹けば北になびき、北風吹けば南になびき、西吹けば東になびき、東吹けば西になびくを見で、かくてあるよ。 (更級・5)

【～ざりし (/–Azari.si/)】

飽かざりし 宿の桜を 春暮れて 散りがたにしも 人目みしかな (更級・19)

【～くは (/–ku.fa/)】

うしろやすくのどけきところだに強くは、うはべの情はおのづからもてつけつべきわざをや。 (源氏・は、き木)

【～からね (/–kar.an.e/)】

宮の御腹は、くらうどのせうしやう蔵人少将にて、いと若うをかしきを、右大臣の、御仲はいとよからねど、え見過ぐしたまはで、かしづきたまふ四の君にあはせたまへり、劣らずもてかしづきたるは、あらまほしき御あはひどもになん。 (源氏・桐壺きりつぼ)

君はいささかひまありて思さるる時は、召し出でて使ひなどすれば、ほどなく交らひつきたり。ぶく服いと黒くして、かたち容貌などよからねど、かたはに見苦しからぬ若人なり。 (源氏・夕顔ゆふがほ)

【～からずは (/–kar.azu.fa/)】

津の守は、ないしのすけ「典侍あきたるに」と申させたれば、さもやいたはらまし、と大殿もおほいたるを、かの人は聞きたまひて、いと口惜しと思ふ。わが年のほど、位など、かくものげなからずは、こ請ひみてましものを、思ふ心あり、とだに知られでやみなんことと、わざとのことにはあらねど、うちそへて涙ぐまるるをりをりあり。 (源氏・少女をとめ)

【～からざりし (/–kar.azari.si/)】

手さぐりの、細く小さきほど、髪ことのいと長からざりしけはひのさま通ひたるも、思ひなしにやあはれなり。 (源氏・空蟬うつせみ)

ないしのかみ尚侍の君の御近きゆかり、そこらこそは世にひろごりたまへど、なかなかやむごとなき御仲らひのもとよりも親しからざりしに、故殿情すこしおくれ、むらむらしき過ぎたま

へりける本性ほんじゃうにて、心おかれたまふこともありけるゆかりにや、誰たれにもえなつかしく聞
こえ通ひたまはず。(源氏・竹河たけかは)

【～からざらむ】

父の年老いものむつかしげにふとりすぎ、兄の顔にくげに、思ひやりことなることなきねや閨
の内に、いといたく思ひあがり、はかなくし出でたることわざもゆゑなからず見えたら
む、片かどにても、いかが思ひの外にをかしからざらむ。すぐれて瑕なき方の選ねやびにこそ
及ばざらめ、さる方にて捨てがたきものをば(源氏・はゝき木)

忍びたる事にもあらず、世の中なべて知りたることを、そのほどなどだにのたまはぬこと
と、いかが恨めしからざらん。(源氏・宿木やどりぎ)